

日本の知恵、
プラスチックの知恵

茅葺き

かやぶ

四季を伝える、故郷の原風景

昔の伝統工法で建てられた日本民家の多くは、茅葺きの屋根でした。材料に使うのはススキやアシ、チガヤなどイネ科の植物。これらの植物が、総称して茅と呼ばれています。時には藁が使われることもありましたが、その中で茅葺きに適しているとされるのが、水辺に生えるアシ。「アシは悪し」を連想させるから「ヨシ(良し)」とも呼ぶ地方もあるようですが、雨や雪に濡れても乾燥しやすく、水切れのいい植物です。

茅葺きの屋根は、四季のある日本の気候に寄り添いながら、夏涼しく、冬暖かいという暮らしを守ってきました。残念ながら、屋根を葺ける職人も、アシなどを育む自然環境も少なくなりましたが、どちらも残したい日本の故郷の原風景に欠かせない存在です。科学技術の進歩の針を前に進めるだけではなく、自然界という生態系の中で、人と自然の調和を図るために始まったのがビオトープ。住友ベークライトの静岡工場の敷地内に設けられた「ビオトープ「憩いの杜」」は、2017年4月に一般公開が始まりました。企業が取り組む生物多様性保全の一環として設営されたもので、動植物と人が共生できる杜として、数多くの来場者を迎えています。



国立国会図書館所蔵



住友ベークライト・ビオトープ
憩いの杜

